

山々の緑が濃くなり、田んぼの水面に霧島の美しい自然が映し出される季節となりました。

私たちの食卓に欠かせない米。日本人が米を食べる量は、60年前に比べると約半分に減ってきているといわれています。しかし、米の不作から始まった近年の「令和の米騒動」では、店頭から米が消えたり、値段が高騰したりするなど大騒ぎになりました。パンや麺類など主食が多様化してきた今日でも、やはり米は日本人にとって特別なものということが分かります。

稲作のはじまり

米が日本で作られ始めたのは約3千年前の縄文時代(後期・晩期)からと考えられています。米を作る技術や道具は、大陸から北部九州に伝わり、約2千年前の弥生時代になると、北海道を除く日本列島のほとんどの地域へ急速に広まりました。

水田で米を作るためには、水を引く灌漑施設や農具、収穫した籾を貯蔵

する技術、田植えや稲刈りといった共同作業が必要です。人々は同じ土地に長く定住するようになり、共同作業のつながりが広がる中で村が大きくなり、やがて人々を率いるリーダーが生まれしました。また、米は他の穀類に比べ生産量が多く、備蓄ができるため、その量によって貧富の差を生みました。水田や備蓄された米をめぐる村同士の争いから小さな国ができ、やがて統一的

米

は長く変わることはありませんでした。江戸時代になると、米の収穫量を表す単位・石高で大名の国力や武士の給料、農民の年貢(税)を表しました。その制度は、明治になってお金で納税する税制に変わるまで続きました。

豊作の祈り

米は、霧島市の人々の暮らしにも、深く関わってきました。

豊穰を願うものが多いようです。春には、国分(あのみなか)の天御(あめのみ)中主神社(北辰神社)や止上(とがみ)神社、横川(やすら)の安良神社など各地の神社で田の神舞などが奉納されます。6月には霧島神宮や鹿児島神宮で御田植祭が行われます。秋は、収穫を祝う祭りで俵踊りや棒踊り、太鼓踊りなどが奉納されます。昔から伝わる年中行事を見ると、人々の生活が稲作のリズムで営まれてきた事がうかがえます。

(文責＝堀之内)

なヤマト王権の誕生へとつながりました。米は人々の生活だけではなく、日本の社会や国の成り立ちに大きな影響を及ぼしました。

経済の基本となった米

中央集権的な国ができていく中で、国が人々に田を与え、そこで作った米を税として納める制度ができました(班田収授法)。時代によって制度の変遷はありますが、米を経済の基本とする形

郷土の扉

The gateway to local history

江戸時代に行われた用水路の整備や海岸沿いの干拓事業は、どれも水田を広げて収穫量を増やそうとする取り組みです。米の増産を目指す気持ちは地形をも変えていきました。そうして増えた水田の近くには、南九州特有の石造りの神様「田の神さあ」が祭られました。右手にメシゲ、左手にお椀を持ったユーモラスなこの神様には、豊作を願う祈りが込められています。地域に伝わる祭りや郷土芸能も五穀



清水の田の神舞